

書 評

湯本貴和編、池谷和信・白水 智責任編集 『山と森の環境史』

文一総合出版 2011年3月
381頁 4,000円+税

本書は、総合地球環境学研究所の共同研究プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」の成果の一部であり、シリーズ『日本列島の三万五千年－人と自然の環境史－』の第5巻にあたる。このプロジェクトのうち、本書の責任編集を担われた池谷氏が担当された東北班、および白水氏が担当された中部班の成果が、本書に反映されている¹⁾。具体的には、近世から現代の東北地方と秋山郷（長野県栄村）を事例として、森林と人間との関係が様々な角度から検討されている。その意味で本書は、「山と森の環境史」の包括的な議論というよりは、むしろ東北・中部山岳地帯の地域環境史的な論集として読むことができる。それゆえ、ここではシリーズ全6巻のうち本書1点を単独で採り上げるが、他の巻においても森林や山村を主題とする章があり、併せて参照されることをお勧めしたい²⁾。

さて、最初に本書の目次を掲げておく（コラムは割愛した）。

はじめに 「自然の恵み」をめぐる収奪と管理の対立（湯本）

序章 山と森の環境史（池谷・白水）

第1部 山地の自然史

第1章 東北日本の山地地形と山村（長谷川裕彦・佐々木明彦）

第2章 生物多様性と人間の森林利用（辻野亮）

第3章 なぜクマ、カモシカ、サルは東北で生き延びたか（伊沢紘生）

第2部 藩政期における多様な山地利用の変遷と社会制度

第4章 近世山村の変貌と森林保全をめぐる葛藤－秋山の自然はなぜ守られたか－（白水）

第5章 巢鷹をめぐる信越国境地域の土地利用規制（荒垣恒明）

第6章 猟師鉄砲の地域格差－仙台藩を中心として－（村上一馬）

第7章 マタギ文書の特質－九州狩猟文書との比較から－（永松 敦）

第8章 盛岡藩牧の維持と狼駆除－生態系への影響－（菊池勇夫）

第3部 明治以降における山地の自然資源利用の変遷

第9章 近代山村における多様な資源利用とその変化－北上山地の野生動物の減少と山村の暮らし－（岡 恵介）

第10章 東北地方のニホンザルの分布変遷と人の暮らし（三戸幸久）

第11章 東北・中部地方山岳地帯に残存する大型獣用罾の技術的波及をめぐる（田口洋美）

第12章 木工品製作の変遷と山地資源－秋山郷の木鉢製作を中心に－（井上卓哉）

第13章 近代における林野利用と山村の生業－長野県旧堺村の部落有林野統一事業をめぐる－（関戸明子）

第4部 現在の森林、動物、人間

第14章 秋山郷における山菜・きのこ利用の変遷と採集活動（井上）

第15章 木材資源利用から見た森林環境の変化とシカ（小山泰弘）

第16章 現代山村における資源利用と獣害（池谷）

終章 山と森の自然利用と環境ガバナンス（白水・池谷）

以上のように本書は4部構成をとり、それぞれ自然史、近世、近代、現代に当てられている。執筆陣は大きく分けて、地理学（池谷、関戸）のほかに地形学（長谷川・佐々木）、生態学（辻野、伊沢、三戸、小山）、文献史学（白水、荒垣、村上、菊池）、民俗学（永松、岡、田口、井上）に及ぶ。以下ではまず本書の構成に沿って、各章の内容を紹介しよう。

編者による「はじめに」は、地球研の研究プロジェクトの趣旨を述べる。人間と自然の関係を、

持続的な利用と短期的な収奪との対立の表れとして捉え、「賢明な利用」、特に環境ガバナンスの問題を強く意識していることが示される。これを承けて序章では、文献史学、地理学、民俗学による日本の山村研究に体系化が不足しているとの認識から、「山の自然環境を人々がどのように利用し、どのように保全してきたのか、また時代によってどのような規制がはたらき、それに地元の人々はどうか対処してきたのか」(11-12頁)という本書の課題が明示される。具体的には、生態学的な視点を積極的に取り込むとともに、動植物資源の利用における歴史的な変動や規制が本書の焦点だとされる。

本論に入り、自然史を扱う第1部では、第1章で東北地方の山地地形が概説され、日本海側の豪雪地帯では地すべりや河成段丘といった緩斜面が集落立地の場に選ばれたことが説かれる。第2章では、皆伐や造林など人為的な改変を含めて森林植生の遷移が概観され、人間の利用のあり方によって生物多様性が増減するとされる。第3章では6種の哺乳類(クマ、シカ、カモシカ、イノシシ、サル、オオカミ)の生態が概観され、近代におけるオオカミの絶滅ならびにイノシシとシカの東北地方からの消滅が、水平的な回避行動と近代的な鉄砲の普及が原因であったとされる。

続いて近世を扱う第2部に入る。第4章と第5章はともに秋山郷を採り上げるが、自然と共存する伝統的な山村としてではなく、近世中期以降、環境改変と資源利用をめぐる争いを体験した地域として捉える。人口増とともに焼畑の拡大や木工品の材料となる針葉樹の潤渇が生じ、地域外からの森林伐採の圧力を受けた秋山郷では、木工品の材料を広葉樹に転換するとともに、幕府の巢鷹山制度を「とらえ返し」、森林の確保に努めたことが議論される。

対照的に、第2部の後半では東北地方の狩猟と動物がテーマとなる。第6章は大量の猟師鉄砲があった仙台藩に着目し、猟師の田畑所持が決して小さくないこと、狩猟のみならず害獣駆除に重要な役割を果たしたとする。続く第7章は東北のマガジ文書を九州のそれと比較しながら概観し、旅マガジのアイデンティティ形成の道具として位置づける見解を支持する。第8章では盛岡藩における馬の放牧とオオカミ被害に着目し、鉄砲や毒薬

によるオオカミ駆除のあり方を論じる。「駆除」の結果、人間とオオカミとの共存的関係が崩れ、オオカミの活動範囲が人里に拡大したり、イノシシの増加を招いたりすることになったとされる。

近代を扱う第3部では、引き続き東北地方の狩猟と動物が前半の3つの章のテーマとなる。まず第9章では、第3章で採り上げられた6種の哺乳類の増減と狩猟、ならびにその広範な利用のあり方が議論され、減少・絶滅は単純に狩猟圧だけが理由ではないとする。第10章はサル生息地の分布と地域的な消滅を5kmメッシュのレベルで図示し、近代的な猟銃を手にした農民の乱獲が原因であったと見るとともに、マガジの自然観を紹介・要約している。ただし残念なことに注番号が乱れている箇所がある。続いて第11章はオソやヒラオトシと呼ばれることの多い重力式罠の地域差に着目し、大型獣(クマ、カモシカ)用の重力罠の地域差が小さいことから、これが近世末以降、旅マガジを通じて伝播し、副業として受容されたと論じる。

第3部の後半は秋山郷の森林利用を扱う2つの章で構成されている。第12章では、広葉樹に材料が転換した木工品製作に関して、近代以降も原木を確保する場所の変化や、品物の種類や形態、価値の変容があり、柔軟な対応が木工品製作の継続をもたらしたと指摘する。続く第13章は、部落有林野を村有林に編入する部落有林統一事業と地元の抵抗に着目し、県の側が薪炭材や木工品の材料の確保、枋の実や飼料の入手、焼畑といった入会林利用の意義を理解しないまま、「愚かな利用」と見なしたことを批判的に捉える。

現代を扱う第4部では、まず第14章において秋山郷における幅広い山菜・きのこ採集が採り上げられ、目的の植物に関する採集者の知識が、それらの効率的な採集を支えていることが示される。残る第15章・第16章は、現在の日本の山村が直面している獣害に焦点を絞り、長野県のカラマツ林におけるシカの食害、および岩手県遠野市におけるクマ被害が、それぞれ事例として検討される。前者では長期的な視点が見失われている森林管理が、後者では獣害の原因を判定することの難しさが焦点となる。

終章では、静的で変化に乏しいと思われがちな山村生活が「劇的といってよいほどに変化してき

ている」との見方から、本論の各章の成果が改めて要約されている。その際に、人間による山地資源の利用が、一方では環境自体の改変を、そして他方では資源の管理あるいはガバナンスをめぐる人間相互の葛藤を引き起こすことが、論点として強調されている。従って、自然と人間の関係を測るためには、人間対自然の直接的関係だけではなく、「人間社会内部の政治・法制・経済・慣習・信仰といった視点」(353頁)が不可欠だとする指摘を以て、本書は結ばれる。

以上のように、本書は16の章を通じて、実に多岐にわたる切り口から中部・東北地方の「山と森の環境史」にアプローチしている。また、全体を通じて幾つかの重要な視角の提示や問題提起が為されている。そこで以下では、本書が果たした問題提起に関して、その意義に2点に分けて論評しておきたい。

第一に注目しておきたいのは、本書の基本的な問題意識が従来の山村研究への批判にあるという点である。地理学を含め、日本の山村研究には豊かな蓄積があるものの、ともすれば環境に適応した複合的な生業と独自の文化的系譜を特徴とする「伝統的な山村」を静態的に抽出し、それが近現代に失われたとする見方が再生産されてきた。時代を遡れば遡るほど山村の「原型」ないし本質が見いだせるという想定が、暗黙の前提になっていたといえる³⁾。本書の責任編集者・白水氏の前著『知られざる日本』においても、「通時代的な山村の歴史」が課題として残されていた⁴⁾。

これに対して本書は、「いつの時代の生業はどのような点で複合的であるのか、いつの時代の山村はどのような面で平野部・都市部の影響を受けて、どのような面で影響を受けていないのか」(14頁)を掘り下げて検討する必要を訴える。この問題意識は、過去の山村を環境に調和的な世界として理想化することから離れ、生業の変化や環境の改変、資源利用をめぐる葛藤や失敗に目を向けることを求めるものだといえる。

そのことが最もよく表れているのが、自然と共存的で静態的な近世山村像を反転させた第4章である。「我々が今まで近世秋山の生活として描いてきたイメージは、結局のところ一九世紀以降の姿であって、それは激変期ともいべき一八世紀を乗り切り、資源の枯渇や村落間の対立を克服し

た後の姿でもあった」(91頁)という言葉は、人間による環境の利用が常に環境の変化を引き起こし、それと動態的に連動することを物語っている。つまり、平衡的な人間-自然関係を前提とする「伝統的」山村像ではなく、非平衡的な人間-自然関係のなかで山村の歴史を見ていく必要性が、ここで指摘されているのである。

このような関心は、東北地方における哺乳類の消滅が、いわば本書のサブテーマというべき役割を果たしている点にも表れている。オオカミの駆除が他の動物相に予期せぬ影響を与え、「猪飢饉」をもたらしたことに触れる第8章や、近世末以降、換金交換資源の開発を求めて重力式罠が普及したとみる第11章、近代的な銃の普及と狩猟者の拡大を、哺乳類消滅の重要な要因の一つとみる第3章や第9章、第10章が、その好例である。ただし、哺乳類消滅の要因の解釈をめぐっては、人間の側の技術的進展(銃)、商品としての肉・皮の流通、積雪、伝染病といった諸要因が関わり、それぞれの要因の比重については各章の解釈が必ずしも一致しているわけではない。やっかいなことに、第16章が示唆するように、植物相と違って動物相の定量的な把握は現在であっても簡単ではなく、また獣害の基準も時代によって異なるため、「獣害が存在したのか否か、全国的視野でも、そのための基礎資料が十分に揃っているわけではない」(341頁)といった問題を抱えている。そのことが、人間-動物関係の解釈にどうしても曖昧さを残してしまうように思われる。

それゆえ、近世の仙台藩の猟師の分布を示した第6章や、サルの生息域を近世末に遡って復原した第10章のような基礎的な作業は、高く評価されなければならない。ただしその成果は、必ずしも山村とは言いがたい山間や山麓、丘陵における哺乳類や狩猟の存在を指し示しており、近代の「農民たちは、農繁期以外ひまさえあれば鳥獣を獲るようになった」(193頁)という事態に注意を向けさせる。つまり、本書のうち少なくとも人間-動物関係を取り扱う部分は、序章のいう「山村」研究の枠に収まらないものがある。本書のいう「山と森の環境史」には、もっと広い枠組みを用意する必要はなかったのだろうか。

本書は中世以前を対象時期から除外しているが、おそらく時代を遡るほど、本書で採り上げら

れた動植物と人間との関係は、山村に固有の現象ではなかったと考えなくてはならないだろう。森林が山地に限定的な土地被覆となるのは、特に東北地方においては、歴史的に新しい出来事だと思われるからである。一案としては、中部・東北地方の平野部を含む森林の特徴を、森林域の増減や樹種の変化を含めて概観し、その上で、人間による動植物利用の歴史的変化を捉えるための論点を整理する部分があれば、良かったのかもしれない。

さて、第二に注目しておきたい点として、「はじめに」で示唆され、また終章の焦点となっている資源の管理と収奪、ならびに「賢明な利用」や環境ガバナンス（管理・統治の仕組み）に関する本書の成果を振り返って見よう。本書のなかで、この問題意識が最も明確に追求されているのは、秋山郷における森林の管理域の維持を主題とした第5章と第13章であろう。ここでは、本来は領主の特権的な保護林制度（巢鷹山）を、地元側が資源利用のために流用しようとした近世の動向や、入会地が「荒廃」しているとの長野県の論理に対抗して、部落有林の維持と管理を貫こうとした近代の運動が採り上げられている。いずれも地域外の利用者ないし行政が、既存の資源利用を脅かし、収奪をもたらす側として位置づけられ、「賢明な利用」を熟知する地元の側が、より適切な管理を求めたという構図が浮かびあがる。

こういった森林の空間的な管理をめぐる問題は、古代から現代まで時代を通じて様々な形で見られるものであり、決して新しい論点というわけではない。しかしそれを単なる利益追求の衝突や係争として見るのではなく、環境ガバナンスの視点に引きつけるためには、望ましい森林とその利用のあり方が、同時代においてどのように認識され、あるいは論理づけられていたかに踏み込む必要があるだろう。その点、近世の秋山郷の住民自身も針葉樹を潤渴させてしまったという指摘（第4章）は、持続的な資源利用が実はほころんでいたという意味で、必ずしも地元の側が無条件に「賢明」だったわけではないことを示唆している。材料を広葉樹に転換することで、近現代においても木工品製作が発展したことは興味深い事実であるが（第12章）、環境の変化に柔軟に対応できれば「賢明」と言って良いのか、あるいは結果

的に生業が持続できれば適切な環境ガバナンスが成立していると言うことができるのか、気になる所である。本書が提示しようとした環境ガバナンスの視点の先には、簡単には答えが出せない問題が待ち受けているように思われる。

この点にさらに踏み込むためには、人間にとって山と森の動植物がどのような姿であることが望ましいのか、という単一の正解が存在しない問いを避けて通ることはできない。この問いをめぐるのは、自然の「破壊」とみなされがちな焼畑と害獣駆除が、格好の試金石となるように思われる。例えば、編者の「はじめに」には、西南日本の照葉樹林文化は焼畑を特色とするが故に「森林を破壊」し、東北日本のブナ帯文化は「森林を維持したままで得られる自然の恵みに大きく依存する」（4頁）とされる。しかし、森林を失うことを直ちに「破壊」とみなすのは、遷移が生物多様性を増加させる可能性（第2章）を軽視することであり、林材確保の観点から伐採跡地を「荒廃」（267頁）とみなした林学的な立場とそれほど変わらないように思われる⁹⁾。

一方、オオカミ、イノシシ、シカ、サルが絶滅ないし消滅した東北地方においては、これらの種が「害獣」だと見なされる限り、その消滅は人間にとって望ましいことになる。しかし、盛岡藩のオオカミ駆除を扱った第8章は、「狼との共存的關係を壊して、生態系に介入し、狼駆除に費やされた人間の膨大なエネルギーとは何だったのか」（160頁）と批判的に問いかける。また第10章はサルの地域的消滅の背景に、自然は無限とする思考の存在を推測する。これらの指摘は、哺乳類をめぐるガバナンスが、歴史的に見ればうまく機能してきたというよりは、むしろ欠落ないし破綻していたことを指し示している。

このように本書は、「賢明」な人間－自然関係とは何か、望ましい環境ガバナンスとはどのようなものか、もどかしい問いを読者に投げかけている。しかしこの問いが、多分に理想化された山村像や「伝統的」な資源利用を前提にして為されているのではなく、環境変化や資源利用の変遷の史実を押さえしていく作業が前提となっている所に、本書の最大の意義がある。「賢明な利用」や環境ガバナンスといった概念は、ややもすれば一人歩きして安易に用いられる傾向があるように思われ

るが、むしろ本書の試みは、環境史に即してこういった問題意識に取り組む価値と可能性とを、示しているのである。

(米家泰作)

〔注〕

- 1) 「日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討」ホームページを参照した。<http://www.chikyu.ac.jp/retto/index.htm>
- 2) 湯本貴和編，松田裕之・矢原徹一責任編集『環境史とは何か』文一総合出版，2011。同編，佐藤宏之・飯沼賢司責任編集『野と原の環境史』同，2011。同編，大住克博・湯本貴和責任編集『里と林の環境史』同，2011。同

編，田島佳也・安溪遊地責任編集『島と海と森の環境史』同，2011。同編，高原光・村上哲明責任編集『環境史をとらえる技法』同，2011。

- 3) 拙稿「〈山村〉概念の歴史性—その視点と表象をめぐって—」民衆史研究69，2005，3-20頁。
- 4) 拙稿「書評 白水智著『知られざる日本—山村の語る歴史世界—』」歴史地理学47-5，2005，29-32頁。
- 5) 拙稿「近代林学と焼畑—焼畑像の否定的構築をめぐって—」（原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学』思文閣出版）2011，168-190頁。